
I was born to love you

道造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I was born to love you

【Nコード】

N1666BA

【作者名】

道造

【あらすじ】

スクールランブルの播磨拳児と眠れる塚本天満の話。

天満ちゃんは優しい。

それを知ったのは、初めて会って大分経ってからの事で。だが、それを知る前からずっと好きで。

一目惚れから、この想いはすでに思い出の存在を超えて。今は、もっと愛している。

「……」

横の席で、眠っている天満ちゃんを見ながら、考える。
好きだ。

いや、それはいつも考えてんだが。

この世で俺が生まれた理由は。

天満ちゃんを、好きになるためではないか、とか。

他に理由があるか、とか。

そんな事をマジメに考える。

それを踏まえて、また頭を巡らす。

「」

くう、すう、と静かに眠る天満ちゃん。

今の教室には誰もおらず、ちょうどよい、とばかりに夕暮れ時の日差しが差し込んできた。

もつとも、俺のサングラスではコーヒー色に濁った世界にしか見えないが。

「と」

一応、汚い文字で書き終えたプリント用紙を裏返し、机の上に置く。補習というのも、いいものだ。と、考えた。

こうして、天満ちゃんと一緒にいられる。もつとも、相手は俺の事なんてちつとも意識していないが。というか、寝てる。

「……」

黙し、考える。

俺がこんなに考えるなんて、珍しいと思うぐらいに考える。あまりの自分のアホさ加減に苦悩する事は多いが、ただ考えるのは珍しい。

そんな風に、また考える。

もちろん、天満ちゃんの寝顔を見ながら、だ。

「綺麗だ」

やっと一言、呟いた。

教室で二人、黄昏の射光がカーテン越しに入ってくる中で、唇をまた閉じる。

そつえば、この学校生活の中で、俺は天満ちゃんに対して。

愛の告白どころか、褒め言葉の一つでも並べたことがあつたらるか？

「……」

ある、はずだと思う。

だが、記憶にないということとは微妙なラインだ。

いくら俺が馬鹿でも、天満ちゃんの事だけは覚えてはいるはずなんだ

が。

つまり、社交辞令程度の言葉すら口々に言えていないのだろう。

「そもそも、男として見られてねえんだよなあ」

デカイため息をつく。

おそらく、今の天満ちゃんは、俺の事を弟として見ていて。

沢近や周防に手を出そうとしていて、今は妹と付き合っている男なのだろう。

……。

なんというか、まだ只のクラスメイトだった方が、今の状況よりマシな気がする。

だが、いつの間にもやら、こうなっていた。

半分以上は、自業自得のような気がしないでもないんだが。

「……今の状況もそんなに嫌いじゃねえんだが。そこそこ楽しくてよ」

情けない、と考える。

このサングラスが、全てを象徴している気がする。

未だかつて、好きな相手に自分の面をサングラスで隠し続ける男が存在しただろうか。

漫画や映画ではあるかもしれねえ。

だが、結局。

ヒロインの前で、そいつは最後にサングラスを外さなきゃならねえ。

それが漫画の王道ってもんだ。

そうじゃなきゃ、誰も納得しねえ。

じゃあ。

「」

俺は、天満ちゃんの前でいつサングラスを外すんだ。
結局、それにつきる。

誤解を解いてから？

この顔をまず見せないと、誤解の解きようもねえ。
じゃあ、俺が信頼されてから？

どうやって信頼を勝ち取る。友達としてか。
そもそも。

誤解を解いたからって、天満ちゃんと付き合えるってわけじゃねえ。

「
」

唇を噛みながら、手を目にやる。

カチ、と音がなって指先は止まった。

黒色の物体は、その存在を以って、この世界全てを黒く染めている。

「好きだ」

この台詞も、寝てる彼女を前にしてしか言えない。

いや、寝てる状態だけで言ったにしても、俺にしては僥倖だ。

俺は臆病だった。

いつか絃子が言った台詞を思い出した。

何せ、恋だ。

「嫌われたくねえ」

その想いだけが、思えば体をがんじがらめにしている。

サングラス一つ外すことすら出来ない。

こうして、彼女が眠っている状態でも、だ。

「……」

何か、したかった。

幸せだったはずの光景が、急に物悲しくなり、胸が痛くなる。

だが、俺には何も出来ない。

それが、たまらなかった。

今、俺に何か出来ることがあるだろうか。

頭を抑えて。

腕組みをして。

一人、勝手に悶える。

そうして必死に考えて、やっと息を大きく吸った。

一つだけ、出来ることがあると思いついた。

天満ちゃんに出遭ってから、俺が唯一出来るようになった事だった。

夕暮れは、そろそろ完全に落ちる頃合になった。

太陽が沈みそうで、もうそろそろ夜になる。

「あ、また私寝ちゃってた」

「ああ」

このまま起こさなければ、夜の道は危険だから、という理由で一緒に帰れるかも。

そういう不埒な事を考えてた頭を揺さぶり、生返事を返す。

「あれ、播磨君、待っててくれたの」
「ん？」

俺は慌てて目の前のプリントを表に返し、ペンを置いた。
腕組みをしてふんぞり返り、笑いながら喋る。

「いや、実は俺も寝ちまってな」

「あー、駄目だよ播磨君。もう下校時間過ぎてるよー」

自分も寝てた癖に、ずいぶんだ。

苦笑いしながら、頭をかりかりと掻いた。

「君たち、一体いつまで待たせる気かね？」

「あ、刑部先生」

「君たちがプリントを提出しないと、私まで帰れないのだが」

いつの間にか、憎き物理教師が後ろのドアを開いていた。

はあ、とため息をついた絃子が、ドアに体を寄せながら吐き捨てる。
とうてい教師として正しい姿勢とは思えねえ。

「こんな時間まで補習させる方に問題があるんじゃないか」

「何か言ったかね」

「イイエ、ナニモイッテマセン」

マシン言語で返し、慌てて鞆を握り締め、走って逃げる。

「あ、待ってよ播磨君」

それに連なるようにして、天満ちゃんも同じように俺の後ろについてきた。

少し、いや、かなり足を緩めて、天満ちゃんが転ばないくらいの速度にする。

このまま、玄関口までは一緒に走れますように。そう、願った。

一人、ぽつんと呟く。

「……もう少し早くに、帰すつもりだったのだが」

今日は、君が夕食当番だし。

誰かに聞かれぬよう小さく呟いて、天満のプリントを回収し。次に、播磨の席に置かれたプリントを。

「馬鹿のせいで入れなかったのさ」

その手に拾い上げず、そのまま机の上で裏返す。少しばかり、それに見入った後。

「君にしては、よく」

それを手に取り、天満の机の上に移し。

窓から入ってくる射光に晒して、また見入る。

「いや」

下手な字で埋め尽くされた、赤点だらけのプリント用紙。

その裏側の、A4サイズの白紙に。

「君だけが、描ける絵か」

色も塗られていない、黒い鉛筆だけで描かれた粗雑な。

いや、粗雑な技量で、それを埋めるほど丹念に描かれた。
眠れる少女の姿があった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1666ba/>

I was born to love you

2012年1月4日06時45分発行